

主 題：偽教師たちに惑わされるな① 彼らの正体
聖書箇所：ユダの手紙 3-4節

新約聖書ユダの手紙をお開きください。

前回、私たちはだれがだれに宛ててこの手紙を記したのかを見てきましたが、ユダはなぜこの手紙を記したのか、そのいきさつも記してくれています。私たちはきょうの3節からの学びを通して、ユダがどういう人物であったのかを知ることができると思います。そして彼の警告は、時代がどのように移り変わっても、場所がどこであったとしても、今の私たちが真剣に受け止めなければならない警鐘であると思います。

A. この手紙が記された理由

1. 当初の理由

まず3節に「愛する人々。私はあなたがたに、私たちがともに受けている救いについて手紙を書こうとして、あらゆる努力をしていましたが」と記してあります。この手紙は「愛する人々」と始まっています。まさにユダは、この読者たち、この教会のクリスチャンたちを心から愛していた。そしてユダは「私はあなたがたに、私たちがともに受けている救いについて手紙を書こうとして」と言っています。この「ともに受けている」というのは「共有している」ということです。ユダ自身もこの救いを受け入れていて、その救いを同じように受け入れているこの読者たちにこの手紙を送るのですが、もともと彼が望んだことはこの読者たちを励ますことでした。ユダはこの世的な話ではなくて、主の救いについて、神の恵みについて語ることによってお互いを励まし合うことができると考えたのです。そのことは信仰者である皆さんもよくご存じだし、経験しておられることだと思います。神の恵みを覚える時に、私たちの心は喜びます。主のすばらしさを学ぶ時に私たちの心はより強い確信に導かれていきます。私たちの主はこんなお方であり、主はこんなことをなさった、主はこんな約束を下さっている、みことばを通して記されている真理が私たちの信仰を強め成長させていくわけです。ですからこのすばらしい神がくださった救いという賜物について語ることによって、この読者たちの信仰が励まされることがまず最初に彼が考えていたことであると今のところに記されていました。

「あらゆる努力をしてい」たとあります。「努力」ということばは「熱心である」や「勤勉である」、「真剣である」という意味のことばです。しかも現在形ですから、ユダ自身はずっとこの読者たちを真剣に、熱心に励まそうと考えて、そのために手紙を書くことが必要であると思っていたことをまず証しするのです。一緒に神をたたえることによって愛する兄弟たちを励ましたいとユダは記していました。このユダという名前には「感謝」や「賛美」という意味があります。まさにその名前にふさわしく、一緒になって神様をあがめましょう、一緒になって神の恵みを覚えて感謝を捧げましょうとユダは願っていました。

2. 危険を知って変化した理由

そう願っていたユダですが、この教会が直面している危険を知ることになります。ですから手紙がともに神の恵みを覚えて神をあがめようという内容から、彼らが信じている信仰の激励へと変わったとユダは記しています。「聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生じました。」と。「聖徒にひとたび伝えられた信仰」と書かれています。「ひとたび」というのは一度だけということです。この箇所でユダが教えていることは、聖徒たちに一度だけこの信仰が伝えられたと。それは神から与えられたものであり、神から与えられた真理なのだと。ユダが言いたかったことは、あなたたちは今この救いという真理に立っている。あなたたちは真理を学んできた。その真理というのは人間が勝手に記したものではなくて、神ご自身が一度人々に与えたものだと。このユダは2ペテロと非常に関連していると言いました。2ペテロ1：21では、「預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだ」とあります。つまり聖書は人間が勝手に書いたものではなく、神ご自身が私たちに提供してくださったものだと。まさにここに記されているのは、創造主なる神ご自身が我々人間に与えてくださったメッセージであると。神が一度そのように人々に与え、そしてそれを人々が信じ、それを記し、そしてそのメッセージが広がっていったのです。使徒6：7に「こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰にはいった。」とあります。神がメッセージを与えてくださり、そしてそれを人々が記し、信じ、宣べ伝え、そして広まっていったと。ユダはこの大切な信仰が、

あなたたちが信じているこの宝が攻撃されているから、そのためにしっかりと戦いなさいと言うのです。

この「戦う」ということばは新約聖書のここにしか出てきていないことばです。「戦うよう、あなたがたに勤める」と書いてあります。これは「励ます」とか「力づける」という意味です。もうひとつおもしろいことばは「必要が生じました」です。この「必要」ということばは新約聖書の中には17回出てきます。そしてここでは「～をしなければならない」と訳すべき記し方がされています。ユダは神の恵みのすばらしさを分かち合うことによって彼らを励ましたかった。でもこの教会が大変な危険にさらされていることを知り、自分の愛する者たちが間違っただけの教えによって惑わされている現状を聞いて間違いなく心を痛めたはずで、そこで、この愛する者たちが信仰においてぐらつくことがないように、この愛する者たちが間違っただけの教えに導かれていかないようにと願って、彼らがしっかりと信仰に立って、その信仰のために戦い続ける、このメッセージこそが今の彼らには今一番必要だとしてこの手紙を記したのだと3節で教えます。

◎ にせ教師たちの出現をゆるすもの

① 狼のなりでは来ない

さて、4節を見ると、「というのは、ある人々が、ひそかに忍び込んで来たからです。」、ユダはここで、この手紙を記した理由を記しています。「あなたがたに勤める手紙を書く必要が生じました。というのは」と、こういう理由があるからだと言います。それは信仰の真理を惑わす者たちが教会の中に忍び込んで来たからだ。「ある人々が、ひそかに忍び込んで来た」と書いてあります。どんな人々かと言うと、にせ教師たちです。彼らは教会の中に誤った教え、異端を持ち込んでくるのです。もう少し彼らのことを説明するとこうなります。この人たちは真理を全くを知らなかった人々ではないのです。彼らは真理を知っているが、みずからの意思でそれを拒んだ者たちです。なぜそんなことが言えるかというと、彼らが教会の中に密かに忍び込んで来たのです。泥棒の話をしているのではないのです。彼らは教会にいて人々は彼らに対しての違和感を持たなかったのです。恐らく彼らは歓迎されたでしょう。彼らは聖書的な知識を持っていて、彼らのことばを聞いていると、人々は彼らが大変霊的な人だ、すごい信仰者だと思ったかもしれない。しかし、本当のところはそうではなかったのです。彼らは真理を知っているが、悲しいことに真理を否定しているのです。パウロもガラテヤ2：4で「忍び込んだにせ兄弟たちがいたので、」と言っています。こういうことはユダが手紙を送ったこの教会だけではなくて、どの教会にも起こり得ることであり、どの時代にも起こり得ることです。教会の中に必ずこういった偽りの教えを持ち込む人々が存在してきたし、これからもそういう人たちが誕生していくでしょう。

ここまで聞いて、なぜ教会はそういった間違っただけの教えをする人たちが入ってきたことに気づかないのかと思われると思います。イエス様がマタイ7：15で「にせ預言者たちに気をつけなさい。」と言われた時のことを思い出します。なぜそんなことを言われたかということ、彼らは狼のなりをして来ないからです。彼らは狼でありながら、「羊のなりをしてやって来る」からです。みことばは「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」と言っています。彼らは大変な信仰者として、すばらしい信仰者であるように振舞っていた。ですから多くの人たちはそれを見て何の疑問も抱かなかったのです。

② 教会員が真理の物差しを持っているか。

もう一つ言えることは、教会、つまりクリスチャンたちが学んでいるようで真理を知っていない可能性があります。どういう意味か説明します。私たちは言われたことを聞いて一生懸命ノートを取って覚えようとするかもしれない。でも問題なのは、なぜそれが真理だと言えるのか、そこで語られている真理は本当に自分のものになっているかどうかです。こういう話を聞いたとか、だれだれさんがこういうことを言っていたということは言えるでしょう。しかし真理を自分のものとしているならば、間違っただけの教えが入ってきた時にそれは聖書の言っていることと違うと見分けることができるはずで、でも悲しい現実、いろいろな教えが入ってきても、それを見分けることができない現状、これは私たち日本の話だけではなくて、至る所でそういった問題があります。だから悲しいことに、本当に神の働き人を養成していた神学校が、聖書は神のことばであると教えていた神学校がそれと全く逆のことを教えるようなことが実際に起こっています。かつてはすばらしい教会だったのが、みことばに反することを教えるような教会になってしまったり。もちろんそれはその教師たちが問題であると言うことができるのですが、大切なことはその教会員です。ペレヤのクリスチャンたちのすごかったことは、パウロが語ったメッセージでさえも、それが本当に聖書どおりであったかどうかを確かめた。そんな信仰者になるこ

とです。ただ何となく聞いているのではない。みことばに記されている真理を自分のものにしてしっかりと真理という物差しをもって聞く話、読む話を見極めることが必要です。

悲しいですがみことばを見た時に、この教会の中に、にせ預言者たちが入り込んできたことが警告されていました。パウロは1テモテ4：1で「御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。」と語っています。また2ペテロ2：1でペテロも「しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現われるようになります。」と同じようなことを警告しています。そしてユダは確かに、にせ教師たちは現れたと言うのです。

パウロがテモテに、信仰の戦いを勇敢に戦いなさいと彼の信仰を励ましました。ユダも同じように彼らを励まそうとするのです。そこで、きょうのテキストで「聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勤める手紙を書く必要が生まれました」と語っていました。あなたたちがしっかりと真理に立ち続けるように、神のおことばに立ち続けるように、私はあなたたちを励ます必要がある。それがこの手紙を記した理由だとユダが教えてくれています。

C. にせ教師たちの正体

さて、4節からユダはこのにせ教師たちの正体を暴いていきます。恐らくこの教師たちはその本質的な部分を見せないから、よく観察しないとわからないのでしょう。でもユダは知っています。そしてここに四つの彼らの姿が記されています。

1. 前もって記されている人々

まず最初4節に「彼らは、このようなさばきに会うと昔から前もってしるされている人々」であるとあります。「しるされている」というのは「それが書かれていた」ということです。みことばがそのように記してあった、そのように書いてあるということです。こういった人々は必ずさばきに会うと記されている箇所を確かに我々は見ることができます。例えばゼパニヤ3：1-7にさばきの警告が記されています。

:1 ああ。反逆と汚れに満ちた暴力の町。

:2 呼びかけを聞こうともせず、懲らしめを受け入れようともせず、主に信頼せず、神に近づこうともしない。

:3 その首長たちは、町の中にあってほえたける雄獅子。そのさばきつかさたちは、日暮れの狼だ。朝まで骨をかじってはいない。

:4 その預言者たちは、ずうずうしく、裏切る者。その祭司たちは、聖なる物を汚し、律法を犯す。

:5 主は、その町の中にあって正しく、不正を行なわない。朝ごとに、ご自分の公義を残らず明るみに示す。しかし、不正をする者は恥を知らない。

:6 わたしは諸国の民を断ち滅ぼした。その四隅の塔は荒れ果てた。わたしが彼らの通りを廃墟としたので、通り過ぎる者はだれもない。彼らの町々は荒れすたれてひとりの人もおらず、住む者もない。

:7 わたしは言った。「あなたはただ、わたしを恐れ、懲らしめを受けよ。そうすれば、わたしがこの町を罰したにもかかわらず、その住まいは断ち滅ぼされまい。確かに、彼らは、くり返してあらゆる悪事を行なったが。」

神のみことばに反することをを行い、そのようなことを教える者たちに対する神の警告が記されています。私たちが学んだ2ペテロ2：3にも「また彼らは、貪欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食い物にします。彼らに対するさばきは、昔から怠りなく行なわれており、彼らが滅ぼされないままにいることはありません。」と書かれていました。だからどの時代であっても主のみことばに反すること、真理に逆らう者たちに対する神の審判は繰り返さされてきました。そのことを旧約聖書もペテロも私たちに教えてくれています。ですからユダも彼らは「さばきに会うと昔から前もってしるされている人々」、なぜならこれまでもさばかれた人々と同じことをしているからです。真理に逆らうことを行い、彼らはそれを教えるからです。にせ教師たち、にせ預言者たちはさばかれる運命にある者たちであると。

2. 不敬虔な者

二つ目に「不敬虔な者であり、」と書かれています。「不敬虔」というのは新約聖書の中に9回出てきます。崇敬するの反対、神をうやまうということの反対、不信心です。このことばは神を敬うことも礼拝することも恐れないということの意味をしています。神に対する畏れが全くない、神をうやまう気持ちも全く持っていない、神を礼拝するような思いが微塵もないということです。これは、あなたや私の生まれながらの姿です。例外はありません。すべての人が生まれながらにこのような不敬虔な者でした。ですからパウロがローマ5：6で言うように、「キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んで」くださったと。「不敬虔」というのは私たちです。私たちは神でないものをうやまい、神でないものに礼拝を捧げてきたのです。どうして人間が礼拝を受ける資格があります？人間もほかの動物と同じよう

に造られたものなのに。礼拝を受けるにふさわしいお方はただひとりです。すべてのものをお造りになった唯一まことの創造主なる神だけです。悲しいことに我々は生まれながらにだれひとりその神を神としてあがめることもしない、その方を心から愛することもしない。この方に逆らう者として生まれ、そのように生きてきたのです。だから私たちは例外なくみんな「不敬虔な者」でした。この「不敬虔」ということばは、9回中1回だけ1ペテロ4：18で「神を敬わない」と訳されています。「義人がかろうじて救われるのだとしたら、神を敬わない者や罪人たちは、いったいどうなるのでしょうか。」と。なぜ、人々がさばかれるのかと言うと、それはその人を造った創造主なる神を敬わないからです。そういう人たちは自分の人生だと言って自分の好きなように生きています。そして最期に神に逆らってきたその罪の清算をすることになるのです。ペテロは我々にそのことを教えてくれています。2ペテロ2：5に神は「昔の世界を赦さず、義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護し、不敬虔な世界に洪水を起こされました。」とあります。神がさばきを下されたのです。あのソドムとゴモラに対しても2ペテロ2：6、「ソドムとゴモラの町を破滅に定めて灰にし、以後の不敬虔な者へのみせしめとされました。」とあります。歴史は私たちに神に背を向けて生きている者たちに神からの審判が下るということを教えてくれます。あなたをお造りになった神はあなたのすべてのことをご存じであって、あなたの罪に対してはあなた自身が責任を取らなければいけません。神の赦しを拒んだ者たちには容赦ない神のさばきが訪れます。それはこの歴史が明らかにしているとみことばは私たちに教えてくれます。

にせ教師たちが教会の中に入り込んできた。そしてみんなそのことに気づいていない。恐らく彼らはほかの人たちと同じようにクリスチャンとして振舞い、礼拝を捧げていた。ひょっとしたらいろいろな奉仕をしていたかもしれない。しかし悲しいことに彼らがどんなに願っても神に背を向けた状態では神に喜ばれる礼拝を捧げることができない。当たり前の話です。神に心を閉ざしている人がどうして神が喜ばれる礼拝を捧げることができません？つまり救われていない人は神を心から礼拝することができない。なぜなら彼らは神を敬わないからです。でも形だけは礼拝を捧げているかのように振舞うことはできます。でも神をだますことはできません。神は私たちのすべてのことをごらんになっておられる。人間をだますことはできます。教会の中にあって、そういう人々は多くの人々をだましているのです。彼らのは見かけは信仰的であったかもしれない。実のところは全く神を敬わない、不敬虔な者たちでした。

3. 神の恵みを放縦に変える人々

1) 性的に不道德な人々

ユダが三つ目に「私たちの神の恵みを放縦に変えて」と記しています。この「放縦」ということばは「不道德」とか「ふしだら」、特に性的にふしだらな人たちです。性的願望のままに生きている人たちの話です。パウロはそういう人たちのことをエペソ4：19で「道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます。」と言っています。この「放縦」ということばは新約聖書の中に10回出てきます。そして10回の中でここでだけ「放縦」と訳されています。あとの9回はすべて「好色」と訳されています。2ペテロ2：2では「そして、多くの者が彼らの好色にならい、そのために真理の道がそしりを受けるのです。」とあります。7節にも「また、無節操な者たちの好色なふるまいによって悩まされていた義人ロトを救い出され」、また18節にも「彼らは、むなしい大言壮語を吐いており、誤った生き方をしていて、ようやくそれをのがれようとしている人々を肉欲と好色によって誘惑し、」とあります。最初に見てきたように、この人々は神様の真理を知っているのです。でも彼らはみずからの意思をもって罪の中を歩み続けることを選択しているのです。不道德な歩みを続けていく、性的な願望に従って好きなように生きるという、教会の中に入り込んできたにせ教師たちは自分の快楽を満たすことしか考えていない人たちです。

ペテロはそのことについてこう言っています。2ペテロ2：13-14に「彼らは不義の報いとして損害を受けるのです。彼らは屋のうちから飲み騒ぐことを楽しみと考えています。彼らは、しみや傷のようなもので、あなたがたといっしょに宴席に連なるときに自分たちのだましごとを楽しんでいるのです。その目は淫行に満ちており、罪に関しては飽くことを知らず、心の定まらない者たちを誘惑し、その心は欲に目がありません。彼らはのろいの子です。」とあります。また19節に「その人たちに自由を約束しながら、自分自身が滅びの奴隷なのです。」とあります。

2) 神の恵みを曲解する人たち

そこをわかった上で次を見てください。彼らの問題はそのように生きただけではないのです。彼らは「私たちの神の恵みを放縦に変え」と書いてあります。この「変え」というのは交換するとか曲解する、曲げてしまうということです。つまりこの偽りの教師たちは性的願望の奴隷として生きる選択をしただけでなく、このような生き方を正当化するために神の恵みの真理を曲げて、自分たちに都合よく

解釈していたのです。ウィリアム・バークレーが非常におもしろくて重要な解説をしているのでご紹介します。「疑いもなくこの人々（にせ教師たち）はグノーシス主義に染まっていた。グノーシス主義の根本思想は精神だけが善で物質は本質的に悪だという考えです。したがって肉体は本質的に悪だということになる。だから人間は肉体でもって何をしてもかなわないのだ。肉体は悪だからその要求を十分満足させておけばいい。どうせ肉体で行うことは取るに足らないものだから。さらにこの人々はこういうふうを考えている。神の恵みは大きくて、すべての罪を覆うことができるから、人は好きなだけ罪を犯しても良い。彼は何をしても赦されるだろう。罪が多ければ神の恵みも一層大きくなる。だから罪を心配することはない。こうして神の恵みは曲解され、罪の口実にされたのである。」と。どうせ肉は罪だから仕方がないではないか。また同時に神様の恵みというのは大きくて、何をしても赦されるのだから、好きなように生きて神様に赦しをもらい続けられればいいではないかと。

悲しいことにこのような考え方を持っている人は、今から2000年前だけではないのです。今もそういう人たちがいるのです。神は恵みの神、赦しの神だから何をしても大丈夫と。にせ教師たちは真理を聞いた上で、自分の欲をどうやったら満たすことができるかだけ考えて、自分たちはこれまでと同じように快樂のままに生きていく。どれだけそれが不道徳であっても、そんなことはどうでもいい。自分の快樂さえ満たしたらいいと考えて彼らは歩んでいたのです。でもやっぱり良心の呵責があるのです。そこで彼らが考えたのは、神の恵みというのはどんな罪を犯してもそれを赦し続けてくれる。もちろん神はどんな罪でも赦してくださる。でもだからと言って私たちは好きなように生きていいと聖書は教えていません。パウロがローマ6：1で「恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。」と言っています。神が赦してくれるのだったら、我々は罪の中にいてもいいではないか、私たちは好きに生きていいではないか、自分の人生だから楽しめばいいではないかと。なぜなら神は何をしても赦してくれるのでしょうか。確かに神は私たちの罪を完全に永遠に赦してくださる。でも、神の救いにあずかった人たちはそのような生き方ができないのです。

ですからローマ6：2に「絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。」とあります。つまり、悲しい現実はいエス様を信じて救いにあずかった私たちも毎日の生活の中でさまざまな罪を犯しています。救われる前と同じようなことをしている、そんな自分がここにいます。でも救われる前と救われた後とで何が違うのかということ、罪を犯した時に私たちはそれをよしとしないのです。それを神の前に持って行って神様、私は罪を犯したと言って、それを告白しようとするのです。神の前に正しくありたい、神の前に聖くありたいと我々は願うのです。救われる前はそうではなかったのです。自分の人生だから好きに歩めばいいと、そうやって生きていました。ですからこのにせ教師たちはこうして巧みに神の恵みを曲げて、曲解して、自分たちの罪のまま生きていくというやり方を正当化しようとするのです。そのことをユダは指摘したのです。彼らは神の恵みと教えを都合のよいように自分たちで勝手に曲げて、自分たちの生き方を正当化していた。この人たちの大きな問題は救われていないことです。だから彼らは罪を犯してもそれに対して何の抵抗もない。もし救われているのなら、彼らは神の前にその罪を告白していこうとします。神の前に悔い改めようとして。悲しい現実はいエス様はこの地上にいる限り、栄光のからだをいただくその時までには罪との戦いを経験し、そして罪に対する敗北を経験します。でも救われる前とは違うのです。私たちは罪から離れて行きたいのです。神に喜ばれる者として生きていきたいのです。なぜそういうことが起こるかということ、神があなたを救ってくれたからです。それが神の下さる救いなのです。私たちを新しく造り変えるものです。

この人たちは救われる前と同じように性的な欲望の奴隷として生きることを選択しました。これまでもそうだったし、これからもそのように生きて行くという選択をした者たちです。そんな選択をしながら、恐らく彼らは自分たちは救われていると思っていたのでしょうか。そして悲しいことにこういう生き方を通して、こういうふうには真理を曲げることによって、弱いクリスチャンたちを惑わしていたのです。こういうことが教会の中で起こっていたのです。そんなことが今の私たちの群れで起こっていないのでしょうか？あなたの心の中に罪から離れて神に喜ばれる歩みをしたいという確固たる思いがありますか？罪に対する敗北の連続でもう悲しくて仕方がない、情けなくて仕方がないと。でもその中にあって、何とか神に喜んでいただきたい。だから罪を告白しながら歩み続けている。そんな信仰者ですか？それとも実は救われていないのに救われているかのように振舞っている、そんな未信者ではないでしょうか。

4. イエス・キリストを否定する者たち

四つ目にユダが私たちに教えてくれるのは、この人たちの問題です。4節に彼らは「私たちの唯一の支配者であり主であるイエス・キリストを否定する人たちです」と書かれています。

1. イエス様とは誰なのか。

1) 唯一の支配者

ユダはここでイエス様とは一体誰なのかを教えてください。非常に大切な教えです。イエス様とは「唯一の支配者」であると。イエス様とは「主」であると記しています。たった一人の「支配者」であると。このことばと「主」ということばは全く違うギリシャ語が使われています。でも内容は非常に類似しています。この「支配者」ということばは、ほかの者に対する完全な力とか完全な権威を持っているということです。ですからこのことばは神とキリストへの称号として使われるのです。

どこにこういった表現が出てくるかというと、ペテロとヨハネがエルサレムの町で主イエス・キリストの福音を伝えていた時、彼らは捕らえられました。そしてユダヤ教の宗教家たち、大祭司アンナスやヨハネやアレキサンデル、そのほか大祭司の一族が集まり、その前にこの二人が呼び出されます。彼らは「だれの権威によってこのメッセージを語っているのか」と尋ねます。ペテロもヨハネも主イエス・キリストがまことの神であること、そして人間は死んだ後よみがえるのだと、神の真理を語り続けていました。そしてそのやりとりが使徒4章の中で出てきます。その中でペテロはこのイエス・キリストのみが救い主だということを大胆に証します。使徒4：12-13「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。ペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であることを驚いた」と記されています。その上で彼らは釈放されます。そしてふたりは仲間たちのところへ行って、起こった出来事を報告します。使徒4：24に「これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。『主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。』」と続いています。この「主よ」ということばが今私たちがユダで見ている「支配者」というギリシャ語です。ですから、「唯一の支配者」と言った時に、このことばだけ見ていたらなかなか神にたどり着かないかもしれませんが、この「唯一の支配者」というのは唯一の神のことです。

2) 主

そして次に出てくるこの「主」ということばは、「主人」や「所有者」、「神」といった意味を持っています。メシヤとしての「主」、メシヤとしてのイエス・キリストを表すことばです。ユダはこの二つのことばを並べたのです。唯一の支配者であり、唯一の神である彼は「主」であると。彼は神であり、そして彼はメシヤ、救世主である救い主。彼はすべての「主」であると。このわずかなことばを通してユダはイエス様が一体だれなのかをはっきりと明らかに示しました。イエス・キリストはすべてをお造りになったまこと唯一の神です。イエス・キリストはさっきも見てきたように、私たち人類に与えられた唯一の救い主です。エデンの園から約束されていた我々人類を罪から救ってくれる約束の救世主、メシヤです。同時にすべてのものによって崇拜される主である方です。

2. イエスを主とすることを拒む者たち

ユダがこうしてイエス様というのは一体だれなのかを明らかにしました。この人々はこのイエスを否定したのです。「否定する」ということは「否認する」や「承認しない」、「自分との関係を否認する」、また「神とかキリストに背く」、「不要のものとして捨てる」という意味があります。ですからこの人たちがしたことは、イエス様は唯一の神であり、唯一の救い主であり、すべての主である、そのことを聞いて彼らは自分たちには不要だと言って拒んだのです。これがこの人たちの本当の姿でした。彼らはすべてのものを支配しておられる「唯一の支配者」、主権者なる方を認めようとしなないし、受け入れようとしなない。すべてのものの主であるお方を認めようとしなない、受け入れようとしなない。このような大きな罪を彼らは神の前に犯していたのです。それでいて彼らは信仰者であるように振舞っていた。

ユダがイエス様がどういうお方であることを教えてくださいました。我々が少し考えなければいけないのは、日本の教会の中にもそういった教えが入り込んできた。イエス様がまこと唯一の神である、そうです。イエス様が約束されていた救世主です、そうです。イエス様がすべての主である、そこはまだ私は受け入れたくありません。だから救いにあずかるには、イエス様を神として、救い主として信じたい。信仰を持ってからイエス様を主と認めたいと、こんなメッセージが入り込んできた。イエス様が一体だれなのかと言われた時にこの方は神だし、この方は救い主だし、この方はすべての主であられる。その一部だけを信じてそれが神の前に喜ばれますか？人間の一番大きな問題はここにあるのです。私たちは自分の思いどおりに生きていきたいのです。自分の人生だからだれにも邪魔されたくない。で

すから私たちに服従を求める神は私たちにとって一番煙たい存在です。なぜなら子どもの時からこうしなさい、ああしなさいと私たちの人生をコントロールする存在はたとえ親でも反発を覚えます。私たちは自分の思いどおりに生きていきたい。そうすると、神であることはOK。救い主であることはOK。でも主であることには抵抗があるのです。なぜならイエス様を主と認めるということはこの方に服従することを認めることだからです。それはしたくない。それでもよしという福音が入ってきたのです。私たちが覚えなければいけないのはイエス様がだれなのかです。そして救いというのは、ただ天国に行きたいから切符をもらうのではない。まことの神であり、救い主であり、主であるイエス・キリストを信じて、私はこの方に従って行くという決心が信仰なのです。

イエス様のメッセージは「私についてきなさい」です。罪ということばは英語では“sin”と言います。なぜ罪なのかというと、真ん中に“i”、自分がいるからです。すべての中心は自分なのです。自分の人生、自分を楽しませたい、自分の好きなように生きていきたい。自分の思いどおりに生きていきたい。神ではないのです。それが罪です。

福音のメッセージ、ユダはまた私たちに教えてくれます。このにせ教師たちの大きな問題は神であり、救い主であり、主であるイエス・キリストを意図的に拒んだことです。だから彼らは救われていないのです。救われている振りをしているに過ぎないのです。そして彼らが教会の中で多くの人々を惑わし、間違っただ道へと導いていたのです。だからユダはこの手紙を書かなければいけなかった。信仰者たちにいま一度しっかりと真理に立ちなさいと。神がみことばを通して教えてくださっていることに立ちなさいと。どんな経験をしたとか、どんないい話をだれか立派な人から聞いた、それはどうでもいいのです。私たちが知らなければいけないのは神が何を教えてくださったかです。この真理に立つのです。それこそが私たちの信仰です。信仰者の皆さん、そうやって生きてください。あなたの信仰の土台はあなたが経験したことではない。あなたの信仰の土台というのはこの神のことばです。神が言われたことをあなたは信じ、神の約束に立っているから、あなたは平安を持って生きることができるのです。私たちはそうやって生きるのです。

にせ教師たちをどうやって見つけるか、今私たちは幾つかを見てきました。そして最後に見たのは彼らはイエス・キリストがまことの神であることを信じていないということです。私たちの周りでもそんなことを教えるキリスト教と名のつく教えが存在しています。あのエホバの証人にしても、モルモンにしても、彼らはイエスがまこと唯一の神であることを否定しています。彼らは一体どんな存在かということ、みことばは言います。1ヨハネ2：22「偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否認する者、それが反キリストです。」と。もちろん彼らだけではありません。でもそのような人たちはにせ預言者であり、にせ教師です。そういった教えに惑わされてはならないのです。そのことがこの手紙をユダに記させた理由です。愛する彼らが間違いに惑わされないために記した手紙です。この後にも大切なメッセージが記されています。どうかしっかり学んで我々自身の信仰を強めましょう。というのは私たちの周りに偽りの教えがあふれているからです。みことばに立つこと、それがあなたや私たちの責任です。そして主がそれを助けてくださる。しっかりそのように歩いていきましょう。